

高齢者ケアの国際比較

法文学部 准教授 福井 栄二郎

超高齢社会であるわが国は、現在、岐路に立たされており、とりわけ急増する高齢者に対するケアのあり方が問われています。

そこで福井研究室では、文化人類学的な視点から高齢者ケアの国際比較を行ってきました。具体的には日本・ヴァヌアツ・スウェーデンなどで調査を行い、高齢者たちの社会的なポジション、ケアの実践などを考察してきました。

例えば北欧社会では「自分らしさ」に価値が置かれ、年老いてなお、自分らしい生き方（死に方）が求められるのです。一般には「公助」の割合が大きい北欧社会ですが、それでも国に頼りきりなのではなくて、今の自分にどのような能力が残され、そのなかでどのようなケアを望むのかを、自分自身で意思表示することが求められます。

他方、ヴァヌアツでは国からの支援はなく「自助」で乗り切らなくてはなりません。といっても大家族が基本ですので、介護の人手に困ることはありません。また新生児の命名、畑の開墾、家の新築、孫の世話など、高齢者の知識と労力が必要となる場面が、生活のあちこちにあり、それは社会的な「居場所」が用意されているともいえます。

持続可能な高齢社会を考える際に、このような異文化の事例は、わたしたちに多くの示唆を与えてくれるでしょう。



高齢者に生活史を聞く
(スウェーデン、2015年)



孫の世話も高齢者の大切な仕事
(ヴァヌアツ、2006年)